慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	全體主義に就いて：シュパンの全體主義
Sub Title	
Author	向井, 鍈一(Mukai, Eiichi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1933
Jtitle	哲學 No.10 (1933. 2) ,p.135- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000010-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

全體主義に就いて

（シュパンの全體主義）

向井鉄一

一、はしがき

全體主義は云ふ。「全體なるものは、總額とは異つた一種の結合體、即ちその成分の結合體である。全體的關聯は、要素又は部分によつて生産され得るのではなく、此等の要素に先立つて存在してゐるのである。」「總て存在するものは、全體の肢體として存在する。」かくの如き思想傾向に屬するものとして、生物學に於てはドリーシュの純粋活力説（Driesch—der reinen Vitalismus）、社會學に於てはシュパンの全體主義（Spann—der Universalismus）を思ひ出すが、しかし上に掲げた様な意味での全體主義、即ち部分を以て全體の肢體と見、全體を部分の存在根據とする立場は決してドリーシュ、シュパンの如き近代の學者に限られない。この事は彼等自身も認めてゐる通りである。勿論、彼等の説く所は、近世的思惟の特色をなす個體主義的な（全體主義とは反對に、部分又は要素から全體を説明する所の）數學的物理學的方法に對する反動として現はれ、從つてそれに對立せしめる事によつて方法的特色を浮出せしめてゐるけれども、全體主義的な考へ方は、我等の學問史の始めに於ても之を見ることが出來る。哲學は、元來、その窮極の志向に相應し

て、常に全體性の概念を所有してゐた。シャクセル(T. Schaxel, Grundzüge der Theorienbildung i. d. Biologie, 2. Aufl., Jena 1922, S. 265.)は生物學的見地に立つて次の如く云つてゐる。「有機體的解釋は、活力說的法式化が鋭く反對されてゐる場合に於ても亦全ての生物學を成就し、勢力を獲つゝ科學史の始めにまで遡り、神話的自然考察を滿たし而して素朴的思惟に根ざしてゐる。何等捉はるゝ所なく又何等知る所なき人間が何物かを生動的と云ふならば、彼がその認識を汲みとる源泉の中に、有機體的根本解釋の起源が存してゐる。かゝる解釋は、生活理論そのものが拒否せられざる限り、その總てに含まれてゐるのである。」又シュパンも次の樣に述べてゐる。「この全解釋(全體主義的解釋)は、決して新しいものではない。それは、我等の全く經驗主義的機械的な教育傾向のために、全然我等から失はれ、而して殆んど知られて居らない。既にしてアリストテレスは、總合的狀態の本質を明瞭に認識してゐた。何れの哲學的に高く教育された時代に於ても、同じ洞察が熟知されてゐた。彼の有名な、全體は必然的に部分の前にありといふ言葉は、既に事象を洞破してゐる。勿論、單純な時間的先行ではなく、論理的優先が考へられてゐるのである。」(O. Spann, Gesellschaftslehre, 2. Aufl., Leipzig 1923, S. 42—43.)勿論、古代に於ても、かくの如き解釋に對して、それとは別な要素(例へば、デモクリット)も存してゐたが、しかし古代に在つて支配的な位置を占めてゐたのは、全體主義的な解釋であると云はなければならない。その根據は實に、上にシャクセルも云つてゐる如く、それが人間の素朴的思惟に根ざしてゐることにあるのである。生動的な認識源泉に古代人が直接その「有機體的」根本解釋の起源を負うて居ることは、我等の首肯しうるところである。全體主義的解釋に對し

て古典的な表現を與へたのは、上の引用文でシュパンも述べてゐるやうに、プラトン、殊にアリストテレスである。（――都合上その解説を省略する。讀者は例へば Spann, Kategorienlehre, 1924, S. 19—22. を參照せよ――）而してその諸概念は、かゝる表現を取つたまゝ十六世紀に至るまで支配をつゞけてゐた。生命理論に於てはもとより、凡ての社會科學、精神科學に於てさうであつた。〔新プラトン派及びスコラ哲學に見られるが如き中世紀風の目的科學竝びに神秘論――例へば、「プラトンによつて見れば、夫故、トーマスの社會哲學も亦、客觀的觀念論のそれであることがわかる。それに於ても亦、個人に先立ちて存し個人が與る所の超個人的者、客觀的精神が存してゐる。これ、イデーの降下であり、統制の概念である。」（Spann, Gesellschaftsphilosophie, 1928, S. 21—22.）〕

然るに、ルネサンス、人文主義以降、無機的者の發見は、始めて、他の概念的構造、即ちアリストテレスとは反對の數學的物理學的構造を創り出した（ガリレイの量的測定法、ベイコンの歸納法、デカルトの機械的考察等）。而してこの新なる概念體系は最初より直ちに唯一支配への要求を起した。それは、それ自身完結せられ、認識論的に基礎づけられ、結果に於て豐富であつたがために、過去三世紀の間精神生活を風靡した。しかしそれは、もと、無機的世界より出たのであるから、生物の科學にも又精神、社會の科學にも適合しない。何となれば、例へば生命過程の示す直接的な印象は、決して生命過程をば數學的物理學的概念の上にもたらすことを妥當としないからである。生的素材と非生的素材とを比較して見ても、又機械に對立した意味での有機體の自動を分析してみても、我等は、我等の環境世界の二つの成分をばその外的現象に從つて明らかに又徹底的に區別せざるを得ない。即ち生物と非生

物との現象學的二元論へ導かれるのである。それはとにかく、近世にあつては、數學的物理學的思惟が一切を支配し得ると確かに思はれた時代があつた。歴史及び精神科學の領域に於てさへ數學的法則概念が行はれた〔コムト(Comte)、バックル(Backle)、テイヌ(Taine)マルクス(Marx)等〕。社會科學の方面にあつては、クェネー(Quesnay)、スミス(Smith)リカルド(Ricardo)以來、個體主義的努力が企てられ、それが今日に迄續けられあゐる。英國の聯想心理學は最初より數學的自然科學的思惟の影響の下に立つてゐた。それ故心理學に於てもまた數が一切を支配することゝなつた〔ウェーバー(E. H. Weber)、フェヒナー(Fechner)、ヘルムホルツ(Helmholtz)等〕。而して生物學に於ては、レイモンド(Du Bois Reymond)、ヘルムホルツ(H. Helmholtz)、フィルコウ(R. Virchow)、ルードウィヒ(Carl Ludwig)等の所謂「物理學派」の人々が實際的に研究に於てもその偉大なる結果に到達した時には、「機械」"Mechanismus"は生物學に於て云はゞ自明的なものと思はれた。總ての方面に於て數學的物理學の概念構造は模範とせられたのである。それに加ふるに、カント(Kant)を根據とする認識論的基礎づけが起つて來た。是れは「マールブルグ學派」に於て絶頂に達した。それによると、數學的自然科學は、新時代の所產であり、その特徴である。又近世文化の本來の中心(——それが、基礎的方法に於てのみ認識せらるべき限り)である。而してプラトンのイデーに於てその最初の絶頂に達してゐる所の論理學は、最初から數學及び數學的自然科學の論理學であつたし、又そうであつた場合にのみ論理學として止つてゐたといふのである。

しかし若し我等が人類の精神生活の歴史を振り返つてみるならば、上の如き個體主義全盛の時代の裡にあ

つても、世界及び生活の機械化に對する抵抗が決して抑壓され得なかつたことを知るのである。例へば、ライプニッツに於ける自然法則の目的論的概念、「自然哲學」の有力なる運動、浪曼主義、並びにそれより出發する所の法律學、國家學及び經濟學に於ける歴史學派等の如きがそれである。しかし乍ら、近世の數學的物理學的思惟に對する反動が自覺的な意味に於て、即ちその方法的特色(個體主義に對立した意味での)を明瞭に意識して形成せられるに到つたのは、比較的最近(前世紀の終り以後)の事に屬する。今、それを、學問の各分野に於いて擧げて見ると凡そ次の如くなる。先づ生物學及び心理學に於て有力な「全體的」解釋が發生した。

生物學に於ては反對潮流は、九十年代エールハルト(F. Ehrhardt)、ウォルフ(Gustav Wolff)等によつて始められた。しかし我等はこの所謂新活力說(Neovitalismus)を語るに當つてドリーシ"(H. Driesch)を忘れることは出來ない。彼は、この問題を最も鋭く把捉し、科學的特殊研究より出發して哲學的基礎づけへまで進んで行つた。尙此處で、パウリー(Pauly)、ラインケ(Reinke)、ハイデンハイン(Martin Heidenhain)、シャクセル(Schaxel)等の名を擧げて置く。生物は、有機體、肢體、目標志向性、合計畫性、類、種、規範、病氣、遺傳等の概念を開示してゐる。生物學者は、これらの概念を研究しなければならぬ。併し乍ら、それらは、數學的物理學の概念體系に對しては恐らく別なものなのである。

以上の反動的現象は心理學に於ても之を見ることが出る。こゝでも特殊な概念形成へと進んで行つた。例へば、ブレンタノ(F. Brentano——彼の「志向性」„Intentionalität"の概念)、スタンフ(C. Stampf——„Klassifikation der psychischen Phäno mene" und

„Erscheinungen und psychische Funktion“)、ディルタイ (Dilthey, Ideen über eine beschreibende und zergliedernde Psychologie, 1894.)、又更にキュルペ學派（その、意志及び思惟過程の心理學）の如きがそれである。尙その外、クリューガー(F. Krüger)の發展心理學、ウェルトハイマー(Wertheimer)の全體性心理學、ケューレル(Köhler)の形態心理學、シュプランガー (Spranger) の精神科學的心理學も、此處に忘るべからざるものである。かくて今日、有力なる心理學者たちは、殆んど凡ての領域に於て機械主義的方法を克服せんと努力してゐるものゝ如くである。

之と同じことは又純粹哲學に於ても諸々の精神科學社會科學に於てもみられる。是れは一部分生物學心理學方面よりの反響ともみられるのである。純粹哲學に於ては現象學により培はれ、ハイデッガーの全體性の形而上學に於て發展せしめられてゐる。歷史學に於てはウィンデルバントの有名な「歷史と自然科學」(Windelband, Geschichte und Naturwissenschaft, 1894.)が先づ擧げられる。是れは、リッケルト(Rickert, Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung.)によつて繼承せられ發展せしめられた。ウィンデルバント＝リッケルトの歷史理論に在つては、ロッツェ(Lotze)の「妥當」„Geltung“ の概念を取り入れ、歷史をばその因果的死滅、自然科學的措定（——例へば、バックル、マルクス、環境論、人文地理學等に於けるが如き——）より解放しやうとする企圖が、始めて試みられてゐる。社會科學も亦、かくの如き努力より免れることは出來ない。國民經濟學に於ては、シュパン及びその一派（例へば、ヤコブ・バクサ(Jakob Baxa)の如き）を先づ擧げなければならい。シュパンは自らアダム・ミューラーの後繼者を以て任じ、こゝに極めてロマンティックな經濟學の體系を展開するのである。彼

のこの努力は、一切社會科學の基礎學としての社會學に延ばされ、その「全體主義」„der Universalismus“を結果してゐる。これは彼によつて、ジムメル(Simmel)、フォン・ウーゼ(v. Wiese)、フィーアカント(Vierkandt)等の個體主義的社會學と全然たる對立に置かれてゐる。シュパンの外に、經濟學、社會學等の廣大なる學的領域にわたり、個體主義的、自然科學的方法の排除に向ふものに、マックス・ウェーバー(Max Weber)—「理解的方法」——がある。社會學に於ては、シュパン程明らかに且つ積極的に全體主義を方法學の基礎的原理として高揚してゐるものはないが、しかし全體主義への動向或は個體主義的方法の排擊即ち消極的意味に於ての全體主義として注意せらるべきものは、相當にある。社會現象の解明的基礎原理を有機體との比論にもとめやうとする有機體學派(例へばリリエンフェルド(Paul von Lilienfeld)の如き)が此處にあげらるべきは、云ふまでもない。なほ、マックス・シェーラー(Max Scheler)、テオドル・リット(Theodor Litt)、ゲルダ・ワルタア(Gerda Walther)等によつて發展せしめられる「現象學的」社會學も、此處に忘るべからざるものである。

以上は、全體主義的思想に關する極めて簡單な歷史的概觀である。勿論、それらの間に必ずしも思想的聯關があるといふわけでもなく、又その問題設定に於ても必ずしも一致しない。しかし今私はその一々に就いて詳細に論ずる餘裕を持たない。此處ではたゞ、上に述べた如き全體主義的なる把捉の方法途上に立てられたる一の道標としてのシュパンの社會學體系に就いて叙述して見たいと思ふ。その理由の一は、私の興味が社會科學の方面に向けられてゐる事、理由の二は、シュパンの概念體系が全體主義の最も明瞭な、自覺的な代表者であることである。

二、シュパンの全體主義

(1) 個體主義と全體主義

社會學と社會的個別科學

シュパンは、社會現象を原理的に把捉し規定する概念として「個體主義」と「全體主義」とを擧げてゐる。是れは、一切の社會科學的論考の最初に横はる問題、即ち一切の社會的並びに政治的科學の根本的乃至は宿命的問題に對する彼の解答である。何れの社會科學も、「個體主義」と「全體主義」との論爭より免れることは出來ない。而して彼は、意識的に全體主義の上に立つて、特異な社會學及び經濟學の體系を展開するのである。

彼によれば、社會は、獨立的なる個人の總和であり、從つて只だ個人に於てのみ、社會並びに國家の本來の根據が存すると考へられるか（――この種の立場を個體主義と云ふ――）、然らざれば、社會なる超個人的な聯關が必然的第一次的に存在し、個人はたゞ派生的なるもの、第二次的なるものとしてのみ――即ちたゞ社會なる全體の肢體としてのみその存在を有すると考へられるか（――この種の立場を全體主義といふ――）、その何れかである。

先づ個體主義に就て述べる。之に在つては、先づ始めに事物がそれ自體として存在し、然る後に機械的說明に堪へ得るそれ等の「關係」、「過程」、「連續」が成立すると考へられる。（故にこゝでは自然科學に於けると同じ方法が採用せられてゐる。）故に、原因的見地――彼は此の見地を斯く稱んでゐる――は、先づ包括的なる全體を個々の獨立的なる事物に分解し而してそれ等の關係を覓め、而して又最後には此れ等の孤立化せられた事物をも之をその「特性」乃至は成分（――是れ等も亦相互に原因的な關係を有する――）に小分せやうとするものである。さればこゝでは、事物は只だ

その個體性、機械的連續或は機械的並存に於いて捕捉せられるのみである。「事物概念は關係概念に於いて說明せられる」――是れが、この思索傾向に於ける究極の標語である。

供し乍ら彼によれば、かくの如き原因的なる自然說明は、如何にそれが外面的に偉大なる功績を成し遂げ得たにもせよ、畢竟、世界より神を除き、躍動せる生命に代ふるに死せる機械論を以てするものである。殊に精神科學乃至は社會科學に於けるその失敗にあつては、洵に慘澹たるものがある。個體主義は、社會の如き精神的なるものゝ理解にとつては、全く無力であり、しかも我等の經驗と相背馳する。原因的方法を以てしては斷じて精神科學に獨自なる洞見は成立し得ない。即ち、原因科學（自然科學）としての精神科學は不可能なのである。

かゝる方法は、全體を說明するに、部分の「交互作用」を以てする。しかし、この「交互作用」なる概念は、一の社會科學に何等獨自の對象（――これは、何れの科學も所有せねばならぬところのものである――）を與へるものではなく、寧ろ、社會科學よりその對象を奪ひ去るものである。然らば、その理由は何處に存するのであらうか。この點は之を明確に觀察して置く必要がある。交互作用なる概念は、一切の實在性を成分に移すことによつて、社會科學よりその對象を奪ひ去るのである。何んとなれば、これ等の成分は、原理的に獨立のものであり、それ自體存立し得るものであり、それ自身作用する個々のものであり、その相互の作用によつて何者かを成就すべきものであるからである。換言すれば、これらの成分のみが眞に存立し得るのであり、反之、獨立者としての又全體としての「社會」そのものは、最早や存立し得ぬのである。されば之を要するに、部分の本源的なる交互作用なるものが

あれば、實在性はたゞ部分の中にのみあり、而して聚合せる全體――我等は、之を、全體と云ひ總體と云ふ――は、只單に一個の抽象、派生物たるに過ぎず、それ自身作用する何物でもないのである。（――ジムメルの「心的交互作用としての社會」なる概念に對するシュパンの論難は猛烈を極めてゐる。――）（※）

（※）かゝる原因的方法は、夫の、我等の時代よりは甚だしく遡りたる精神史の轉向期から、卽ちルネサンス、人文主義から始まつてゐる。中世紀風の目的科學並びに神秘論（是の二つは今日最も輕視されてゐる）の廢棄、一切の生成變化を以て原子に於ける機械的進行に過ぎぬとするデモクリトスの見解への復歸によつて、當時既に、ガリレイに於ける現象の嚴密なる量的測定法、ベイコンに於ける歸納法、デカルトに於ける自然物の機械的考察等、一般的に云へば、現象の、純粹經驗に於ける系列による考察が構成されたのである。かくてこの考察法は、近世の學的生活に於て又一般精神生活に於て支配的な位置を占めるにいたつた。

さて以上の如き個體主義の理論に對してシュパンの全體主義は斷然たる對立を示すものである。今シュパンの全體主義に就て述べるに當つて、その形而上學的背景を顧る必要がある。シュパンはその社會學を、意識的に、客觀的觀念論の形而上學的基礎の上に置いてゐる。彼の最廣義の社會概念によると、「社會はその本質上全體性である。而してこの全體性の核心は精神的協同體の裡にある。人間社會の本質と淵源とは精神協同體の裡にある。從つて社會は本源的に精神的部分的全體性の裡に實現せられるのである。（科學、藝術、宗教哲學は協同體の、別言すれば客觀精神の部分的全體たるものである。）而して人間の行動は、一切の精神的者を實現し展開させる特性を持つた派生的要素として始めて現はれるのである。」（春秋社發行世界大思想全集第六〇卷拙譯『社會科學方法論』五頁）社會の精神性を把握するものは、全體主義を措いて無い。「全體主義に在つては、諸個人の精神的關聯が、正に而して獨り、一切の精神生活の發源點をなすのである。而して反之、人間の外的助力は、生活の、從つて又社

會の派生的な而して正に外的な現象形式であるにすぎぬ。」(O. Spann, Gesellschaftslehre, 2. Aufl., Leipzig 1923, S. 89.)ハンス・フライヤーは、その著『現實在の科學としての社會學』(Hans Freyer, Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft, Leipzig und Berlin 1930, S. 68—69.)に於て、次の如く述べてゐる。「さて、シュパンは、この科學論的決定をば、哲學的演繹の完全なる光の中に押し移して居る。彼の精神の形而上學は、次の兩のテーゼに到達して居る。即ち、精神はたゞ「肢體間に」即ち眞實の協同體の中に於てのみ活く事、及び他面に於て社會的現實在は實現せられ體成せられた精神に外ならぬと云ふ事、是れである。社會は精神であり精神は社會であると云ふ此の二つの方程式は、社會學の運命を決定する。それは社會學をばロゴスの科學とするのである。——即ち、最早たゞ單に、社會生活が有意味的構造の多樣性として把捉せられ得る許りでなく、それより遙か徹底して、社會的世界が、その總ての部分機能及び個々現象を伴へる全體として、精神的體系として考へらるべきであるといふ意味に於て。……社會生活は、本質上、時間に於ける生起ではない。——是れは、たゞ、その外面であるに過ぎない。內より見れば、それは精神的實質であつて、その構造法則は、この精神的實質の體成秩序及ぶ上位關係に於て與へられて居る。ロゴスの構造は同時に社會の構造である。精神の哲學は、社會學の機關である。」されば、シュパンの企圖は、その學問論的決定をば、社會なる事實の本質より必然的なものとして基礎づけやうとするに在る。彼の『範疇論』(O. Spann, Kategorienlehre, Jena 1924, S. 1.)には次の如く述べられてゐる。「世界の顏から何時の時代も輝きわたる閃光は、如何なるものもそれ自體としては存在せず、又存在するを得ず、一切は支へられて居ること、而し

て又存在は、一層大なるもの即ちそれを包括するものに依存し、從つてそれは、若しそれを包括するものの外に出でゝそれ自體存在することとなれば、無に歸して仕舞ふことを示してゐる。人間は時々の精神的協同體なくしては精神的に死滅して仕舞はねばならぬであらう。」「存在するものは總て全體の肢體として存在する。」

今此處に、一切の實在性を交互に作用する部分に與へる所の、似而非全體の圖式をA（αβγ）とすれば、この圖式は次の如く解かれる。Aは、或時は「家」を意味し、次には「燒瓦爐」を、又「民衆」、「軍隊」、「市場」、「工場」、「國民」を意味する。これに對し、α、β、γは、それぞれの場合に於て、それらの成分（煉瓦、人間）を意味する。さて今、全體が部分の交互作用により發生せざるものとすれば、こゝに次の事が明瞭となる。

家は決して煉瓦そのものをば成分として有しない。「家」とは、煉瓦より出來たものではなく（何となれば、それは、石灰石でも、大理石でも、木材でも、鐵筋混凝土でも、紙壁でも、破璃方壁でも構はないからである）、幾多の室、臺所、地下室等を有するものである。併し乍ら、「室」とは、或る給付を伴ふ有意味的な機關を意味する。而して又、「有する」とは、體成せられる、展開せられる、即ち交互作用によつて發生しない、との謂ひである。之と同樣に、燒瓦爐は、煉瓦で出來たものではなく、煉瓦生產の爲の或給付に對する空間即ち仕事場を有するものである。「家」も「燒瓦爐」も、その諸部分の合計から出來るのではなく、諸部分を超越する一種特獨な全體性である。「家」も「燒瓦爐」も、煉瓦を材料としては居るが、それ〴〵別個の全體性の體成である。以上と同一のことは、民衆、軍隊、市場、工場、國民に於いても云へる。これらは、これらの

究極の「要素」（若し之を獨立的なものと見ることが出來るとすれば）が同一のもの即ち人間であるにも拘らず、それぞれ別個の全體性である。「軍隊」といふ全體はその肢體（機關）として幾多の軍人を有する。「市場」といふ全體はその肢體（機關）として幾多の買手と賣手とを有する。「工場」といふ全體はその肢體（機關）として企業家、工場長、勞働者等を有する。又「國民」といふ全體はその肢體（機關）として國民精神の擔當者を有する。決して諸々の人間が種々なる交互作用により夫の諸全體性を産出し組立てるのではない。――何となれば、（一）人間そのものは全然存在せず、（二）またある國體に所屬する前に既に國民的に規定せられた人間なるものも、或る市場、或る經濟界の肢體となる前に既に賣買を行ひ又經濟を營む人間なるものも、或は又、自分がその中に在つて戰ひつつある全體と、自分がそれに對して戰ひつつある超全體（超全體、その領域に於て反對が行はれる）とに所屬する前に既に戰爭を行ふものも決して存在しないからである。この、成分（肢體）をして獨自に作用するを得せしめない「前に」が、最も決定的な點である。この外何れの例をとつても、常に、之と同一のことが云へる。社會も、國家も、經濟も之を多數の人間とその交互作用とによつて定義することは出來ぬのである。されば、Aは決して α、β、γにより規定せられ（集積せられ、合計せられ）るのではなく、却つてその逆に、Aが第一次的者、第一位的者、根元的者であり（――家、國家、國民等――）、而してこれが、材料としてのα、β、γに於て體成せられ、展開せられるのである。

シュパンによれば、アリストテレスの有名な「全體は必然的に部分の前にあり」といふ言葉は、洵によく、事象の眞相を道破してゐる。言ふ迄もなくそれは、單純なる時間的先行ではなく、論理的優先を意味する

ものである。アリストテレスは云ふ、「身體全體が無くなれば、最早や手も足も存在しては居らぬ。たゞその名が殘るのみである。……何となれば、何れの對象の概念的規定も、その仕事とその仕事を遂行する能力と(卽ち、その行動、その特性)の中に存し、從つてその對象が此れらを有さなくなつた場合には、我等は、それが以前と同一のものであるとは云へず、たゞ同じ名を有して居ると云ひ得るだけだからである。」かくの如き斷定系列は、犯すべからざるものである。全體の外に出れば、何れの部分も最早以前と同一のものではなく、全然別箇の何物かである。總合的狀態は、獨自な性質を有する獨立のものである。卽ち、それは、性質よりも論理的に先にあるのである。夫故に、死せる身體では、手は最早や手ではなく、謂はゞ「骨」であり「肉」である。之とは反對に、生ける身體では、手は決して「骨」や「肉」ではなく、一定種類の行爲要素である。又同樣に、國民經濟の外に出れば、人間は最早や、國民經濟的全體の肢體として現はれる夫の經濟行動の支持者ではなく、生物學的(動物的)の又は心理學的の本質それ自體である。反對に、彼は、國民經濟の肢體としては、決して生物學的の又は心理學的の本質性ではなく、この獨自なる全體の肢體であり性質である。(*)

(*)しかし乍ら是れは、彼に從へば、決して彼の發意創見に出づるものではなく、何れの時代に於ても——卽ち、古代印度竝びに古代支那の哲學に於ても、プラトン、アリストテレス、新プラトン派及びスコラ哲學の學說に於ても、或は又古代獨逸の神話及び獨逸の理想主義に於ても、既にしてカントの所謂「科學の事實」なるものは、非因果的なる方法——卽ち、部分の名目上獨自の「交互作用」(これは、一の錯覺であり、一の想定である)の代りに、全體をその部分の肢體性に從つて分析する所の方法の成立を示してゐる。併し乍ら是れは何れの時代に於ても、一切の單純なる眞理と同樣、たゞその特相に於いて把捉せられ又適用せられるに過ぎなかつたのである。

而して彼の企圖は實に、此の根本思想を以て新たに知識

概念の根柢となし、斯くて此處に科學の再生なば古き理想主義的傾向の中に求めやうとするに在るのである。

以上述べた所によつて、社會全體の中の特殊領域を取扱ふ社會的個別科學の上に一般的考察により尙ほ一個の科學を建設すべき方法論的可能性が明らかとなつた。かゝる科學は、社會に於ける一定の部分形式、部分的全體性（例へば經濟の如き）を問題とせず、全體そのもの、即ち「社會」なる總合全體性を研究の對象とするのである。

かくて社會科學の方法論的性質竝びに社會學と社會的個別科學との相互の位置の問題は、既に根本的に明らかである。社會學の對象は社會的全體そのものであり、個別的社會科學のそれは、獨立の科學的考察に堪へ得る限りでの特殊的側面、部分的領域、機關組織である。こゝに形式的社會概念と實質的社會概念との區別が生ずる。シュパンは、この區別をば、ジムメルの形式主義的見解とも反對に、又他の經驗主義的方向の方法論とも反對に、次の如く發展せしめてゐる。

社會學は一般的社會科學である。しかしこれは、個別的社會科學の綜合として考へられるものではなく、全體としての人間社會をその獨立な、統一的な對象とする所の科學である。そこで此の科學の主要問題と任務とは次の如くなるのである。

一、一般に「社會」とは何であるか、何がその一般的本質をなすのであるか。この問題は、形式的社會概念を形成すべき任務を設定する。

二、社會は、その現象の種々なる部分領域又は側面（經濟、法律、國家等の如き）に從つて、如何に體成せられるか。而して又その組織的關聯は何であるか。――この問題は、社會の本質の特殊化、或は換言すれば、總合的社會體の構造と內容との、從つてその形式的構造

とその諸生活內容に於ける實質的體成との認識に向ふものである。經濟、法律、國家、政治、宗教を社會現象として考察するとすれば、こゝに問題となるのは、社會的全體の、諸分肢又は諸部分に於ける體成である。

シュパンはこの、社會の特殊化の概念をば、內容的、實質的又は實際的社會概念と稱び、第一のものを一般的又は形式的社會概念と云つてゐる。――實際的社會概念の中には又、個々の現象種類（部分的全體）の本質並びにそれら相互の關係を探究すべき任務が含まれてゐる。(*)

(*)彼は云ふ。「社會なる概念は、それが社會現象と非社會現象（例へば物體的、化學的、生物學的並びに心意的現象の如き）との境界を劃する一般的本質又は根本標識を表示する限りに於ては、形式的である。而して又それは、それが種々なる根本內容、部分領域、部分的全體若くは余の所謂客觀化體系への人間社會の分岐を表示する限りに於ては、實質的（實際的、內容的）である。」（拙譯『社會科學方法論』一頁）

三、社會的全體及びその特殊化の變化と發展法則とを探究すべきものとすれば、――この任務は、歷史的發展の理論（歷史の理論、歷史の解釋）の建設に及ぶべきものである。

上に述べた任務及び概念の規定は又、次の如き命題に於ても示される。

一、形式的と實質的とに分かれる社會概念は、社會學の主要概念であり、それを一個の獨立科學とする所の獨特の問題である。

二、社會學の主要概念としての社會概念は、同時に、一切の社會科學の最高且つ中樞的なる概念であり、從つてそれらの方法論的並びに體系的構造に於ける最高の問題である。社會的個別科學の體系は、それによつて建設せられ、又その周圍に集まる。

こゝにシュパンが云ふ所を短的に示せば次の如くなる。社會的個別科學に對して、その理論的基礎をなす

ものは、社會學である。而してこの社會學の對象たる社會は、二つの概念に於て、即ち形式的社會概念と實質的社會概念とに於て、把捉せられる。前者は、一般社會學を形成する。これは、社會の本質的なる問題を決定し、その構造法則乃至は最高なる政治的命題の意味を分析的に明らかならしむるものである。又後者は特殊社會學を形成する。これは、我等の社會的知識を社會的個別科學に區分するの基礎的理論をなすものである。從つて、社會の部分的全體の理論であると同時に、一切の社會的個別科學の一般的理論又は原理學でもあるのである。

(2) 社會科學方法論

上に我等は、シュパン全體主義の輪廓を辿り、併せて社會學と社會的個別科學との關聯が彼によつて如何に考へられたかを明らかにしたから、こゝでは、彼の詳細なる方法論的展開について述べることとする。

イ、社會學

既に述べた如く、交互作用は決して社會の根本現象ではなく、第一の實在が決して部分の中にないとすれば、社會學が部分から上昇して虛幻の全體に前進するを得ないといふこと、從つてそれは歸納的ではなく此の意味に於て又純粹經驗科學ではないといふこと、即ち、それが眞の實在たる全體よりその規定としての肢體に下つて行く、夫故に分析的、演繹的であり概念科學である事が明らかである。

勿論、歸納も綜合も用ゐないことはない。しかし支持的であり、本質的であるのは、全體の認識である。——分析的なもの、非因果的なもの、肢體的なものが方法を規定し支持する。夫故に、經驗の豐富、即ち從來歸納の把捉したものの範圍は、因果的(個體主義的、心理主義的等)社會學に於けるよりも小さくてはなら

ぬわけである。只だ經驗のみが全體を知らしめる。而してこれを我等は、經驗により推知せしめられたものとして更めて分析しなければならぬのである。この推知せられ、經驗せられる全體性は、たゞ經驗によつてのみ、充足、多樣、完全を保持するが、その本質、その理解は、たゞ全體から、即ち分析的にのみ、把握しうるのである。何人も、ニーベルンゲンの歌を、文字に於ける歸納によつてではなく、全體から理解するのである。シュパンによれば、自然主義的社會學は、個々の文字を、それ自體として、獨自の實在として讀まうとするものであり、それらを、全體の、言葉の歌の肢體として理解しやうとしないものである。

ロ、社會科學的方法の統一

從つてシュパンは社會科學的方法の本質を次の如く法式化してゐる。即ち、社會科學の方法は部分の現象に現れるその肢體性を探究するにあるのである。一層精確に云へば、社會科學に在つて專ら行はれる方法は全體對部分(肢體)の關係に由つて規定せられ、從つて次の諸點にその統一を見出すが如きものである。即ち、

第一には、その討究領域の全體性を認識し、是れをその本質性に於いて規定し且つ又他の全體性より區劃せねばならぬ。この課題は結局次の如き必然性へと向ふのである。

第二には、肢體性の性質、即ち肢體的存在の本質を規定せねばならぬ。斯くの如き本質は、その全體に、それ(その全體)が高次の全體、社會的總合全體の肢體たる限り屬するものである。即ち此處に在つては例へば、如何なる範圍に於いて、經濟は社會の肢體であり、國家は社會の肢體であるかが、問題とせられるのである。斯かる基礎の上に、次の課題が生ずる。

第三には、所與の全體(一定の肢體性の特質を有する)の、中全體或は亞全體(下つては個々肢體に至る

迄)に於ける體成を、その時々の特質に於いて規定し、且つ斯かる肢體的連結の法則性を規定せねばならぬ。

一切の社會科學に於ける最高の課題は、その對象の全體性と、斯かる全體性の社會的總合全體に於ける肢體性の特質とを認識することにあるのであるから、一切の社會的個別科學は、方法的必然性に由つて、その究極の本質規定を一般社會學に仰がねばならぬことになるのである。シュパンによれば、この點に、一切社會科學の方法の統一が存在する。方法の統一が存在するといふのは、諸社會科學の統一が存在するといふのと同じ意味である。斯かる統一は、一般的、全支配的社會學なるものが存在し、唯だ國民經濟學のみが獨立的なる、理論的個別科學として是れより分岐するに止まるといふことに於て與へられる。一般社會學は經濟學と共に、原理的ではなくとも實際的な獨立性を有する記述的諸部門、即ち統計學、人種學によつて、また(それが只記述的にのみ把捉せらるべき限りに於ては)歴史によつてその基礎を固められ、更に體系的若しくは學理的(學理を序列する)道德學及び法律學、最後に先天的精神科學(論理學、形而上學、思辨的道德學並びに法律學)をばその補助部門とする。(*)(**)

(*)「實に、一切社會科學の方法の統一こそ、普遍的社會科學としての社會學の成立とその效果とを完全に論證し且つ保證するものである。」(拙譯『社會科學方法論』二〇頁)

(**)尙、社會的個別科學による一般社會學的問題の把捉については、拙譯シュパン『經濟と社會』(春秋社發行世界大思想全集第六〇卷)を參照の事。

ハ、個體と全體との關係

個體が全體に對し、部分的全體が總合全體に對して如何なる關係に立つかの問題を論理的方法論的問題として考察すれば、それは現代からは遠ざかりたる手段、即ちアリストテレスやプラトンが把持したが如き或ひは既にウパニシャッドに於て極めて明瞭に現はれてゐ

るが如き古代の古典的論理學の手段に由つて捕捉せられねばならぬ。斯かる手段は最古の命題「全體は部分の前にあり」の中に完結せられて居る。此の命題こそは社會科學的方法論の最高の指導概念であらねばならぬ。

この問題の論理的方面はこゝでは此れ以上論考する必要はない。たゞ、それが論理的に主として次の三樣の形態をとつて現はれることを注意するに止めて置く。

一、全體の部分に對する關係――個體は全體性の肢體たる意味に於ての部分として現はれる。

二、一般の個に對する關係――個は、その類の標型として現はれる。

三、一の多に對する關係――多は一によつて規定せられるものとして現はれ、一は規定するものとして現はれる。

されば問題のこれら諸形態に相應して次の如く云はれるわけである――全體は部分（肢體）の前にあり。類は個の前にあり。一は多の前にあり。

其故に、個體の全體に對する關係は、全體は部分の前にありなる命題に從つて與へられるのである。

此の命題を根本的に論考することは必要である。是れは――此のことは殊に强調されねばならぬ點であるが――現代の自然科學的思惟が稍もすると解したがる如く、全體が獨自な衝動力として又は一種の神秘的な「不意の出現者」として部分を「惹起する」、「生ぜしめる」、「生產する」ことを意味するのではない。斯くの如きは原因的考察であらう。而して斯かる考察方法こそは、社會（ここには原因はなく、唯だ、妥當性、階層序列、根據（例へば論理的種類の）並びに成行（例へば論理的種類のそれ）があるのみである）に於ては決して何等の地位をも占め得ないのである。若しも全體が部分を原因的に生產するものとすれば、全體は素材的者又は中心力として把捉せられ、それ自體で（單

獨に）存在し得るであらう。同様に部分は（全體の外に）規定せられた片、個體として捕捉せられ是れに全體が作用し、又是れが全體に反作用することとならう。然し乍ら斯かる原因的思考法に由つては、「全體」の概念も「部分」の概念もその固有の意味を失つて仕舞ふのである。この場合眞實に殘るものとては、唯だ、原因複合體、原子的累積、作用の合計等があるのみである。

斯くこの命題は、原因關係一般を問題とせずして、唯だ、全體は論理的に部分の前にありてふことを意味するのみである。若しも部分が論理的に前にあるならば全體性は任意の個體の集合によつて偶然に成立し得るであらう。全體はその本質上（その理念上）、何物かがその肢體、その部分たり得る以前に、或ひは一層嚴密に言へば、それが體成せられ肢體に展開せられ得る以前に存在しなければならない。是れが、「論理的に前に」たる所以である。

以上を、社會に適用すれば、次の如き意味となる。即ち、人間は、彼が同種の個體たる他の人間と結合され、堆積され、合計されたゞけでは社會的全體の肢體となるものではない。彼は唯だ、以前には彼の裡に靜止してゐるに止まつた肢體たるの特性が實現せられ現實化せられた場合にのみ、社會の肢體となるのである。文字がニーベルンゲンの歌により始めて肢體となつたと同様に（既に內面的に存在してゐた全體性によつて）人間は、例へば先づ工場があり彼がその肢體となることによつて始めて工場勞働者となるのである。工場の理念は彼より出來たものではなく、また彼がその成立に彼自身として寄與するところがあつたとも主張せられ得ない。全體（本質、理念）が先づ存在してゐなければならぬ。彼は唯だ、彼の肢體たるの特性に置かれてゐる夫の部分を現實化（實現）するに止まるのである。されば、肢體たるの特性が、彼よりではなく全體

性より派生せられるのは、宛も夫の文字の意味がそれ自身よりではなくニーベルンゲンの歌より生ずるのと同樣である。

斯くて、若し個體が徹頭徹尾、全體は部分の前にありなる命題に從つて全體に關係するならば、こゝに個體的自我（個性、人格性）は果して存在するのであらうか、それは如何なる意味に於て救はれ得るのであらうか、といふ疑問が生じて來る。何となれば、然る場合には個體は、只に精神的全體性（共同社會）の機關（肢體）たるに過ぎず、それ以上に出でて如何なる精神的現實性をも有しないからである。個體は、それを個體として見た場合、單なる抽象である。一切の眞なる、第一義的且固有的なる現實在は、常に全體の裡に横はるのである。蓋し、個體の一切の特性が、肢體的存在、肢體性に分解せられるからである。

二、全體とその部分的全體

全體の概念に於ては、その部分に對すると同じ關係が部分的全體に對しても成立する。

社會の根本事實が全體性にあつて單一性にないことは、既に述べた。社會に現はれる一切の個體は唯だ肢體でのみあり、斷片、原子ではない。從つて一切の個體には、全體は部分の前にありといふ命題が妥當するのである。

さて此處に、一の中心點並びにその周圍に集合した諸肢體より成立しないといふことは、一切全體性の必然的な根本特性をなすものである。何となれば、若し之を窮極的に考へるならば、肢體の同一性を要求し、而して唯だ同一なるもののみが一の中心を得てその周圍に同一の方途に於て集結し得ることとなるからである（集中の根本原理）。併し乍ら同一性は、一切の有機體、一切の眞正なる全體性の本質をなす段階（分化）及び差別と矛盾する。一切の眞正なる全體性は部分的

諸全體性（獨自の中心點を有せる）に於て段階を形造り、從つて眞實には、部分的全體及び亞全體の段階構造、階層序列（段階的系列）より成立する。故に我等は次の如き區別を設けることが出來る。

一、總合全體（例へば人間社會、人間有機體）二、部分的全體性（例へば國家、法律、經濟。人體に於て之に比すべきものは消化器系統、神經系統、筋肉系統の如き諸器官系統）三、部分的全體の裡にある中全體性又は亞全體性（例へば消化器系統に於ける胃、國民經濟に於ける工業組織）四、肢體或ひは個體（是れは、原子の如く一種類にして無形態、同質にして無定形なものではなく、細胞の如くに最小なる小有機體、最小なる全體性であり、謂はばそれ自身一の國家であらねばならぬ）。

一切の全體性は、それが現實在と存在とをかち得るが爲には、內容的に異なつた「諸側面」、「諸器官體系」——即ち諸部分的全體に解體せられねばならぬ。これは總合全體そのものが何等の獨自なる規定性、存在を有せず、殆んど何等の特殊なる實體を有しないといふ根本事實より必然的に生ずることである。例へば人間有機體そのものは何處に見出さるべきであらうか。——何處にもない。捕捉し得るのは唯だ筋肉、心臟等の如き部分的全體のみである。同樣なことが人間社會にも妥當する。それは、それ自體としては何處にも見出され得ないが、國家、法律等として始めて——具體化せられた特種な部分的全體として始めて現はれて來る。即ち、部分的全體にして始めて固有な規定性、若しくは具體的な實體を獲得するのである。

斯くの如き部分的全體の本質規定（特殊的者又は具體的者並びに肢體的者）に由り既に、その總合全體に對する關係が與へられてゐる。それに對して本質的なのは、肢體性の規定である。

從つて部分的全體は總合全體に對して如何なる關係を有するかの問題は、次の如く答へらるべきものである。それに對しては一般に個體若しくは肢體の全體性に對する關係に於けると同一のことがあてはまる。

されば、部分的全體も個體と全く同樣に、全體は部分の前にありてふ命題に從ふものである。

肢體は究極に於てその作用により規定せられるが故に、此處より次の如く推斷せられる。――部分的全體の概念は專らその作用を以て與へられる。部分的全體はそれが特種な（特殊な）作用を有する以上、獨自な部分的全體として存在を獲得する。「有する以上」とは、斯かる特種性の標準に依るの謂である。

是れに對應すべき社會學的概念構造の事實を選ぶならば、――「經濟」なる部分的全體は、（到達せらるべき目標に對する）「手段」の體系てふその作用に於て、「社會」なる總合全體の肢體である。斯くて是れには社會に於ける爾餘の總合性が目標の總合全體として對立する。同樣なことが、「國家」、「法律」、「科學」、「藝術」、「宗教」等の何れの部分的全體に就いても云へる。

ホ、部分的全體對部分的全體

部分的全體相互の關係は決して部分對部分のそれではなく、他の部分共のものが最初の部分の肢體となるか、或ひは部分對全體の關係が現はれるかである。要約すれば、部分的全體相互の關係は、決して直接的なものではなく、常に全體性への迂路をとるものである。

先づこの事實を人間有機體に於て解明して見やう。血液に對しては、筋肉は唯だ、脈管壁として、心室として、血液循環の領域として、血液消耗或ひは血液培養の場所として、血液を以て滿たさるべきものとして等――されば常に血液作用の場所としてのみ存在する。――また神經に對しては、筋肉は唯だ、相提携すべきもの、感覺を傳へるもの――從つて神經の作用範

圍、神經活動の場所、神經そのものの一種類としてのみ存在する。――更に筋肉に對しては、血液は、血液（獨自な器官系統として血管を循環するところの）としてではなく、唯だ筋肉を養育するものとしてのみ、從つて究極に於てはそれが唯だ筋肉の成分たる限りに於てのみ存在し、神經は唯だ、筋肉の一定の生活機能、生活樣式として、即ち收縮等を媒介するものとしてのみ存在する。筋肉は、血液と神經とが筋肉的性質を有する限り、此の兩者によつて生活し、神經は、血液と筋肉とが神經的性質を有する限り此の兩者によつて生活する。而して此れ等兩者の間に於て他の接觸樣式他の關係樣式を考へることは出來ないのである。是れは次の事を意味する。神經は唯だ、全體に於けるその肢體的特質若しくは作用的特質に由つてのみ生活し、筋肉は唯だ、全體に於けるその肢體的特質若しくは作用的特質によつてのみ生活する。全體に對すると異なつた關係をばそれは有しないのである。

一切は唯だ、總ての、それに親近を有するもの（特種な親近を有するもの）によつてのみ生活する。

斯くの如き現象は、場合によつては一層明瞭に、社會に於ても現はれてゐる。例へば經濟は、「目標に對する手段」なる標識をその肢體的特性並びに作用的特性に於て與へられてゐる。從つて此の特性は、その社會的總合全體に對する關係を規定するのである。又、この特質に於てのみ經濟は他の部分的全體に對立して現はれるのみである。即ち、諸部分的全體（その種類の如何を問はず）がそれ自身「經濟」となるか――（同種化）、或ひはそれらがそのまま「社會」（總合全體以外の何物でもなき）であるか――（全體化）である。一例を擧げれば――

經濟にとつて國家は、「國家」（組織、統一現象等）ではない。從つて經濟の「國家」に對する「影響」も、

「國家」の經濟に對するそれも有り得ない。「國家」は、萬人の奉仕すべき目標、即ちそれに對して「經濟」なる體系が單純に手段として關係するところの、「社會」なる總合全體の一斷片であるか（例へば國王、國家官吏が俸給を支拂はれ、國民が租稅を納付して、國家構造が形成せられる等）、或は――此の、他面よりすれば「國家」を意味するものが、經濟そのものにあつて「經濟」となるか、その何れかである。一般に經濟行動が、國家生活によつて造られた事實を、手段として即ち經濟手段として用ゐる場合には、「國家」は經濟の部分となるのである。（斯かる經濟手段は、是れを「高次の資本」と稱ぶことが出來るであらう）。若し行政の正確、嚴格、淸廉が尙ばれ、國家によつて締結された通商條約が多數の商人並びに企業家に對して「新販路開拓」の手段となるならば、――「國家」は全く經濟手段となるのである。

然れば部分的全體たる「國家」は「國家」として經濟に對立し得るものではなく（それに直接「作用」し、それと「關係」し得るものではなく）、唯だ、總合全體に屬するものとしてか（總合全體は此の場合單なる「目標體系」である）、然もなくば經濟の肢體、成分そのものとして對立し得るに過ぎない。――同樣な關係が他の一切の部分的全體に對しても保たれる。即ち法律は經濟に對して經濟手段であり（債權法、商法、法律的保障）、科學は經濟に對して「經濟手段」である（例へば、數學的公式の架橋家に對する如き）。科學は架橋家にとりて數學的認識でも「科學」でもなく（何んとなれば、是れは、架橋の技師乃至企業家には無關係且つ不可能なる、公式の論理的數學的考察であるからである）、全く鋼鐵や鐵と同樣な、架橋に對する手段である。

逆もまた同樣である。國家にとつては經濟は唯だ國家自身の成分たるに過ぎない。國家は、それが國民經

濟、民衆娯樂或ひは科學的並びに宗教的生活の何れを組織するにもせよ――それが自らの方法によつて組織する以上、いつに國家である。それが組織するところのものの「もの」は、それにとり謂はばどうでもよいのである。されば、經濟は、國家との關係にあるためには、國家に變化しなければならないと、言ひ得るのである。斯く變化せざる限り、それは「經濟」ではなく、一般に非國家的者であり、總合的全體の部分である。

同樣なことは、他の部分的全體に對しても妥當する。法律にとつては、國家は、經濟は、科學は、藝術及び宗教は決して夫々の特種な部分的全體たるものではなく、皆一樣に、社會の總合全體、非法律的者、從つて法的に秩序立てらるべきものである。又經濟、國家、科學が法律との關係に於て現はるべきものとする限りそれ等自身先づ法律に變化しなければならない。法律とは規範の體系である。而してこの體系の素材（規範によつて規整された所の）が經濟的特性を有してゐても（經濟法）、或は又家族生活（家族法）、科學生活（單科大學及び大學校の法的關係）、國家生活（國法）の何れに屬してゐやうとゐまいと、それは法律にとり全く無關係である。

最後の例證を科學にとつて見やう。科學の見地よりすれば、法律は諸概念の論理的構造であり、また經濟は手段の階層序列の論理的構造（例へば特に複式簿記は斯かる純粋論理學の明瞭なる表現として規定せられ得る）であり、國家も、國家的組織的行動の「合宜」（コンセクエンツ）、「非矛盾性」、「統一性」を規定する概念の論理的構造である。

斯くて、如何なる例證を選ぶにせよ、また一の部分的全體の他の部分的全體に對する關係を如何樣に叙述するにもせよ、常に我等は次の如き結論に到達するで

あらう。――問題の部分的全體が他の一切の社會現象を其自身肢體となすか、或ひはそれに對して他の社會現象が全く總合全體の支持者として現はれるか、その何れかである。(*)

(*)かくの如き、部分的全體に關して得られた洞察は、個體に對しても亦適用せられ得る。個體は、我等が上に個體細胞、小有機體と名付けた意味に於て全く部分的全體たるものである。一切の部分的全體が其時々に考察せられた部分的全體に變化するといふ事に現はれる內的統一性並びに純交互性は、必然的に個體の全體に對する關係にあつても表現せられてゐる。

シュパンは、部分的全體が單に肢體としてのみ現象し、この部分的全體は決してその獨自な特性の儘對立し得るものではないといふこの結論を以て、彼の研究がもたらす最緊要なる結果の一に擧げてゐる。方法論的に見れば、是れは、從來原因的考察方法が必要欲くべからざるものの如く思はれてゐた(圖式として把捉せられたる史的唯物論を見よ!)領域に於て、その方法を打破することを意味する。今や、この部分的全體間には斷じて因果的「交互作用」の存在しないことが明らかである。部分的全體は、專ら肢體として全體に對立する。是のことは、社會を支配するものは獨り部分對全體の關係のみであり、斷片對斷片の因果的交互作用の關係でないことを意味するのである。(*)

(*)前述の部分的全體對部分的全體の關係からして又、國家が法律を「產出する」のであるか、或ひは法律が國家を「產出する」のであるかといふ古來の論爭問題に、一道の光明が投げられるのである。此の問題は、正當に把握せられるならば、何れの部分的全體が他に對して(論理的)上位を占めるか、何れが論理的始源であるか(論理的優先性、始源性、第一義性を有するか)といふことである。此處では就中、經濟に唯一の第一義性と嚮導とを認めた所のマルクスの唯物史觀が典型的であつた。

答へは極めて明瞭である――何物も他を「產出」しない、し又斯かる意味での第一義性は何物も全く之を有しないのである。國家が法律を、法律が國家を、經濟が(マルクス

の唯物史觀に於けるが如く)「上層建築」(法律、國家等の)を「產出」するのではなく、國家は全體性の肢體であり、法律は全體性の肢體であり、經濟は全體性の肢體である。かゝる肢體性は、全體性に於て種々の階位を執り得るし、又慥かに執られねばならぬのである。何んとなれば、部分的全體は總合全體に於ける階層序列に從つて現はれるからである。併し乍ら部分的全體は、他の部分的全體(そのもの)とではなく、唯だ總合全體とのみ肢體關係をなすが故に、その種々なる階位は相互關係に於ける論理的優先性に於ては現はれるを得ないのである。

へ、存在と當爲

既にしてカントに於ては、理論理性と實踐理性とは相互に區別せられ、宛も二つの獨立的能力ででもあるが如くに相分離して現はれてゐる。是の理論的能力と實踐的能力との分離と共に、又、存在と當爲とは嚴密に分割されるのである。卽ち存在は、客觀的に、又知識として把捉せられ、當爲は、唯に人間によつて當爲せられたるもの、爲さるべきもののみならず、又事物に理念的に屬するもの、美的並びに論理的當爲をも包有する。存在の認識と、目標(意欲の、行動の)に對する關係にあるものの認識とに於ける相異りたる悟性の作用を確立せやうとする方法論にとり斯かる區別が、存在者一般(存在者として把捉されたる對象)と科學の對象とを相分離するものと見る本體論に對するとは全く別な意義を有することは明らかである。

事物は、若しそれが方法的(方法論的)見地からではなく、本體論的見地から考察せられるなれば、全く別のものとなる。然るときは、完全性(是れから主觀的判斷の眞僞が分離される)が事物そのものの裡にあること、完全性が實在に屬すること、或ひは之を一層近代的に表現すれば、本質と價値(當爲、妥當、規範)とが最深に於て相交錯して規定せられることを承認するのは、素朴的意識にとり明かである。——また徹底的なる檢覈もその承認を確證するであらう。此處にシ

ニパンは又、アリストテレスの言葉をあげてゐる。卽ち、アリストテレスは云ふ、「完全は不完全の前にある。」是れは、彼の、「全體は部分の前にある」といふ今一つの言葉を補足してゐる。現代の用語例に移せば、當爲は存在の論理的始源者であるとの謂である。ヘーゲルは論理に卽して同一のことを、本質は現象する、それは事物の根據であると敎へてゐる。現象は決して迷妄ではなく、——顯現せられたる、存在する所の本質である。——卽ち、當爲せられたる存在に外ならぬのである。

ここより存在と當爲との關係の方法的解釋に對する端緒を求めるならば、次の如き結果が得られるのである。事物の本質概念は、同時に、事物に於てあるべきものの概念である。事物は、特質卽ち肢體よりなる全體として現はれる。「肢體」は「肢體的」である。卽ち「存在する」と共に「當爲される」のである。何んとなれば、それは肢體として謂はば全體に於て妥當し、何物かを當爲し、全體の有意味的部分を示すからである。故にそれは在るべきであるが故に在るのであり、また在るが故にあるべきなのである。その存在は、充たされたる當爲であり、(肢體的なる) 使命、規定であり、その當爲は、存在を充たし、「本質」を充たし、創造するのである。存在の本質とは、當爲されたる者の實現である。而して是れは、實在の本質概念に對して次のことを意味するであらう——實在に於ては唯だ、當爲される者、完全者のみが探究せられる。——これは、論理學がアリストテレス以來、一切の「歸納的論理學」にも拘はらず、その概念論に於て事實上基いてゐる命題である。

本質認識と價値認識との統一は、到る處到達し得るのであらうか。社會科學に在つては、之を肯定することが出來る。此處では、斯くの如き統一は事實上、我

等の認識が充分深化せられた場合到る處に到達せられてゐる。貨幣がその本質上何であるかを知るものはまた、完全なる貨幣とは何であるか、從つてまた貨幣は何であるべきか――是れは、明に貨幣の本質を以て標示せられるものに外ならない――を知つてゐる。完全なる貨幣はまた、不完全なるものより一層多くの實在內容（一層多くの本質內容及び特質）を持つてゐる。もとよりその場合、主觀的目的により當爲せられたものは、本質に存するものより、また本質完全性より嚴密に區別されねばならぬ。從つて、貨幣の本質（客觀的國民經濟的なる貨幣任務）より生ずる貨幣の完全性（當爲されること）は、多數の經濟人にとつては、その限られたる目的より、主觀的に又は不完全に現はれるのである。

以上私はシュパンの社會科學方法論の輪廓を語り終へた。彼の說く所には、勿論、訂正と深化とを要すべき幾多の點があるであらう。例へば、彼が形式社會學に與へたる批判は、該學派に關する現今の批判の根幹をなすべきものであるとは云へ、少しく妥當を缺くものではなからうか。とはいへ、彼の所謂全體主義なるものが現代の餘りにも個體主義に向けられたる社會科學方法論の將來に對して一の敎訓的なる示唆を與ふべきものであることも否定出來まいと思ふ。社會は少くとも人類そのものと同じく古くからある。人間社會が文字通り「發生」するといふこと、卽ち全く孤立した非集合的存在の狀態から生じて來ると云ふことは、何處にも見られない。我等の見るのはただ經驗に於て現在する社會のみである。社會とは與へられたる事實である。故に、嚴正な科學的批判的態度を取るものは、此の與へられたる社會的事實を與へられたる其の儘の姿に於て考察することから始めなければならない。然

るに、既に知られてゐる如く、社會及び或る種の文化財をば全く非集合的なる存在より導致し說明せんとする合理主義の企圖や、又それを利益、集合及び契約等に於ける洞察より導致せんとする試みは、凡て、經驗上の基礎を缺いてゐる。けだし、社會の「發生」は、既にも述べた如く、一切の經驗の範圍の外に有るからである。夫故に、それらは、何等經驗に於て與へられず又何等の經驗によつて實證せられざる所の豫想から出發するものと云はなければならないのである。元來人間の知識なるものは、現實在に於て渾然たる一體をなす所の全體社會を、その部分的結合に分析することは出來る。けれども此の分析せられた部分から有機的關係を組上げ原整序を概念的に恢復することは出來ないのである。ファイグル (K. Faigl, Ganzheit u. Zahl, Jena 1926, S. 174—175.) は云つてゐる。「……只だ數學的物理學的生起に對してのみ基礎を打ち立てるとすれば我等はそれが有機的者を說明するに充分でない事を知る。されば我等は科學の事實をば認識論的に說明する目的に到達しなかつたのである。我等は基礎をば更に深め、それが只單に無機的科學の構造のみならず、有機的科學而して最後には精神科學の構造を支へる樣にせねばならぬ。……此處に於ては、一切の科學が皆それぞれの基礎の上に生じたる獨自の概念構成を保つにも拘らず、生物に於ける生起と精神的者に於けるそれとは同一の形式原理によつて支配されて居る事が示される。是の事實は既に人々が精神をば有機體として解釋しやうとした點にも看取する事が出來る。併し乍ら、精神的生活を有機的生活に還元する事も或はその逆も不可能である。二つの生起法は同一の上位概念、卽ち全體的關係の下に在る。」個體主義の拒斥は必然的に、全體主義的把捉へと向ふ。なほ、序ながら、上のファイグルの著は、今之を社會生活の方面に

限つて考へるならば、主に自然科學的方法を排撃する消極的方面に限られ、生物と區別せられる社會生活を考察すべき獨自の方法の積極的な確立へと向つて居らない。生物との比論によつて社會生活を研究することは、上にファイグル自身も云へる如く、たとへその發見的價値が如何に大であるにもせよ、結局、獨自なる學を基礎づける所以でないのである。社會學的理論を有機體との比論に基かしめやうとする有機體學派の誤謬も實に此處にあるのである。

筆者は今こゝで社會學上の全體主義に就て一々說述する余裕を有して居らない。既に「はしがき」にあげた有機體學派、現象學的社會學の外にも、二三全體主義への動向或は個體主義的方法の排撃卽ち消極的意味に於ての全體主義を注意することが出來る。デュルケイムは、社會的事實が事物として取り扱はれねばならぬことより出發して、「理想主義的」並に「生物學的」社會學に「機制的」若しくは實在主義的社會學を對立せしめて、次の如く述べてゐる。「從つて社會の生命に關する說明は、社會それ自身の性質中に於て求められなければならぬこととなる。事實に於いて、社會の生命は、時間的にも空間的にも個人を超越するが故に、それは、自己の權威に基いて定めたる行動樣式、思惟樣式を個人に强制する能力を有するものと考へられる。而して社會的事實の特異なる標示であるところの右の壓力は、全が個の上に働く壓力である。」（田邊壽利譯デュルケイム『社會學研究法』二三九頁）「……社會は諸個人の單なる集積ではなくして、諸個人の結合によつて作られたる一の組織であり、それ固有の諸特質を有する特異なる一の實體を顯現するものでなる。」（同上二四一頁）デュルケイムの「機制的社會概念」は、シュパンが彼自身の社會概念との類似を認めてゐる如く、全體主義的方向の中に數へることが出來るのであ

る。（拙譯シュパン『經濟と社會』二〇七頁參照）全體主義的動向は、シュパンの極力拒否する形式社會學派の裡に於ても現れてゐる。フィーアカントはその著『社會學』第一章中の一項たる「全體性の思想」に於て次の如く述べてゐる。「經驗の不足の爲めに現實に首尾一貫して度外視する事が出來ないやうな人間の概念の中には、既にして事實上、社會生活の全體性、從つて又社會の概念が潜んで居る。それ故に人は、內的に結合せるものをば先づ孤立せる物に分解し、然る後又それをば其處から構成するのである。社會が個人の交互作用によつて發生し或は又斯かる交互作用の上に打ち立てられると云ふのも亦、同樣に、誤つた表現法である。交互作用なる概念は寧ろ既に社會なる概念を豫想して居るのである。正當に云へば、それは專ら次の如き意味を有する。――社會はその肢體の交互作用に於て活動する。」（Vierkandt, Gesellschaftslehre, S. 55.）即ち、此處でフィーアカントの云ふ所に據るも、人間を內的に結合せられざるものと見やうとし、然も實際に於てその關聯を無視し得ないと云ふのは、一の論理的矛盾をなすものである。人間社會を結合せられざる人間の總額と解釋することは、それ自體として矛盾なからう。しかし事實上人間社會は、此の場合には、又屢々日常生活の考へ方に於ても、それとは異り、社會的人間の總額として解釋されてゐるのである。人間は一般に、個人間の關係なり內的關聯なりを知らず識らずの中に豫想する。それにも拘らず、社會をば個人の單なる集合と說明し論じやうとするのである。

しかし私は、シュパンに依つて成就せられたが儘の全體主義に對して凡ての意味での滿足を見出すものではない。この點に關して詳論する餘裕を今持つて居らないが、私には、ハンス・フライヤーが其の著『現實在の科學としての社會學』（Hans Freyer, Soziologie als

Wirklichkeitswissenschaft, Leipzig und Berlin 1930, S. 68 ff.) に於て述べて居るが如き批判がシュパンの方法論に對して最も多くの妥當性を持つて居ると考へられるのである。以下フライヤーの批判を摘記して此の論文の結辭に代へたいと思ふ。

フライヤーによれば、既に引用した箇所よりも知られる如く（上記一四五頁參照）、シュパンはその社會學をば意識的に客觀的觀念論の形而上學的基礎の上に置いてゐる。こゝに一種の流出主義的辨證法が全構造或は少くともその核心（「精神起源的者」）を結合することとなる。かゝる意味構造及び價値構造は、そこで、云はゞ現實在の記號を與へられる必要がある。即ち、それは、現實在として時間に於て考へられる必要がある。かくて我等は社會の構造概念を持つのである。「彼の社會學は、總ての歴史的現實在を形態及び意味關聯の範疇の下に於て、從つて文化體系の科學から借りて來た範疇の下に於て解釋することを意味するものに外ならない。」（七二頁）シュパンの方法論の原理的缺陷も實に此の點に見出される。三段論法や藝術作品は、かくの如き範疇によつて解釋されうる許りでなく、事實解釋されねばならぬのである。かくの如き形像に於ては、何物も生起しない。それらに於ては時が靜止してゐるのである。全體に於て始めてその意味をうる所の、即ち眞正の肢體である所の意味要素が、無時間的妥當性を持ち一の構造につながれる。しかし社會的構造は時間に於ける現實在である。個人がその中に在つて完全に消滅して仕舞ふものでなく、その肢體性に拘らず失ふ可らざる自己の存在を保つてゐるといふ事は意味關聯に對する社會的形像の最も深刻なる差異をなすものである。シュパンは、社會的綜合のこの區別を强調して居らぬわけではない。しかし彼はそれを論理的に完成させて居るといふよりも、むしろ豫定的（プログノスティッシュ）

に強調して居るのである。尙附け加へて置かねばならぬ事は、一切の社會的構造は時間的先行者より出で來り時間的後行者になつて行くといふ事、歷史的運動がそれを通じて行はれるといふ事、それは的確なる形式ではなく、實在的諸力の狀態であり、又自己滿足的な形態ではなく、現實在の部分であるといふ事である。社會的形像の歷史的本性は、その形態的性質に結合せらるべきである。この二つの素質よりして始めて、對象適合的なる社會概念が生じうるのである。シュパンに在つては、「個人と協同體」の問題は、窮極に於て肢體性の概念により覆はれてゐる。既にしてそれにより社會生活はその生動性を失ふのである。群の全體性の問題は、精神的意味形像との比論によつては、失はれて仕舞ふ。社會は歷史的現實在であるから、それは必然的に一切のロゴス科學的形態概念を却けるのである。

要するにシュパンの學說は、眞正なる流出主義であることが明である。而して流出主義的思惟の一切の危險、殊にそれに特有な反歷史性を有してゐる。一切の流出主義は、絕對的中心に基く一切現象の共通特徵のため、現象世界の中に於ける具體的區別及び具體的關係を無價値とする。一切の流出主義は、その論理的形而上學的系列のために、殊に現實在の時間的歷史的變化を無價値とする。現實的事物が本質上然かある所のものは、それが絕對者の形而上學的現象過程に於て意味する所のものにより一義的に規定せられる。シュパンに於て見出される所の、社會概念の歷史化に對する萌芽は、必然的に流出主義的思惟の限界內に閉ぢ籠められてゐる。社會が歷史的に考へられてゐる所に於ても亦、それは核心に於て、非歷史的であるのである。

以上私は、フライヤーがその『現實在の科學としての社會學』に於てなしてゐるシュパンの批評の要を簡單に

摘記して見た。私はシュパンの方法論に對して、原理上、フライヤーの批評を受け容れねばならぬと思ふのである。反歴史性、即ち新なるものの發生の説明に對する困難――この點にシュパンの學説の弱點が見出されるのではなからうか。茲にこの問題を提出して一先づ擱筆することとする。